主な記事
2面　小教区紹介、ひと、典礼奉仕
3面　島原半島の旅、若い力
　　諸委員会紹介
4面　医療のともしび
　　教区スケジュール
　　書籍紹介

カトリック高松教区報

2010年7月4日（第137号）
発行所　カトリック高松司教区 広報委員会
〒760-0074 高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659　FAX 087-833-1484
Email
教区：catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.ne.jp
広報：tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成：yosei@takamatsu.catholic.ne.jp
WEB http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

教区民喜びの中で助祭叙階式

谷口広海終身助祭叙階式

「忠実に使命果たす」

すべてに仕える者に

高松教区に新しい助祭が誕生した。六月六日（日）、桜町の司教座聖堂で谷口広海氏の終身助祭叙階式が厳かな中で行われ、信徒たちは喜びに華やいだ。

叙階式のミサは溝部脩司教が司式。福音朗読後に叙階の儀が行われ、助祭候補者・谷口氏の呼び出し、選出があった。続いて溝部司教が助祭の務めについて訓話。「すべての人に仕えるキリスト中心の生き方に徹して下さい。司教、司祭団を助けるように」などと述べた。その後、助祭の務めを果たすことを出席者の前で約束。諸聖人の連願の後、溝部司教の按手と叙階の祈りがあり福音書が授与された。晴れて助祭となり新しい祭服を着けた谷口師が紹介されると、聖堂の信徒たちは大きな拍手を送った。

「すべての信徒が奉仕者とともに、まことの愛のうちに一つに結ばれ、心からあなたに仕えることができますように」との拝領祈願でミサが終了。司祭団、修道女連、信徒の各代表から祝辞があり、四国の各教会から花束と霊的花束が新助祭に贈られた。続いて谷口新助祭が「祈りへの感謝と使命を忠実に果たしたい」との決意を述べた。

最後に溝部司教が『司教とともに働く人がもっと出たらいいと思う。これまで教区の中から出なかったのはなぜか。上意下達のかたちだったからではないか。信徒が自立し、下から信仰がかきたてられるようなかたちがなかったからではないのか。新しい出発点として考えよう』との示唆に富んだ話があった。

式後はカトリック四国会館で祝賀会があり、会場に入りきれないほど集まった司祭、シスター、信徒たちが新しい助祭の誕生を祝った。

〔谷口広海助祭略歴〕
長崎・佐世保の三浦町教会出身。サレジオ会東京調布神学院、上智大スコラ哲学科で学んだ。三浦町教会で典礼委員長、教会学校教師、地区結婚セミナー講師などを歴任後、〇八年高松教区に移り働き始めた。
現在、三本松教会管理者、教区広報委員長、長尾聖母幼稚園副園長

聖霊の息吹を受けて

高松教区で働きます

六月から高松司教館で働くことになりました、ナミュール・ノートルダム修道女会の中島俊枝です。私たちの会は以前、高知や徳島で働いておりましたので、このたびの派遣をとても喜んでいます。

私自身は四国は初めてですが、岡山からマリンライナーで瀬戸大橋を渡り高松駅に降り立ってまず感じたのは、勢いよく吹きつける風と空の広さでした。聖霊降臨の祭日に初めてカテドラルのミサにあずかり、あの風の勢いをまた思い出しました。私の中に、高松は風の街というイメージが根を下ろし、「風がどこから吹いてくるのか・・」と歌う清々しい聖霊の息吹に重なりました。

中島俊枝シスター

最近のカトリック新聞で、高松教区の家族的な「手作り」の温かい活動の記事を目にするにつけ、一緒に働かせていただくのを楽しみにしていました。こちらに来て、それぞれに与えられた賜物を大事に生かし、主の教会を支え盛り立てて行こうという皆さまの様子を見て、その思いをあらたにしているところです。

聖霊の風に帆を張った溝部司教様のリーダーシップのもと、私も教会をキリストの香りでいっぱいにすることができるよう、皆さまとともに歩んで行きたいと思います。

第一回高松教区司教杯「聖歌合戦」

徳島教会に司教杯

六月六日（日）十一時、谷口広海氏の助祭叙階式に合わせ、教区の聖歌合戦が司教座聖堂で行われた。これは溝部司教の発案によるもので、『よく歌う人は倍祈ることになる』という古くからのことわざがその根拠だという。

同日は教区内の各教会から十チームが出場し、それぞれ練習の成果を披露した。指揮者の手振りにあわせて心を一つにして奏でる美しいハーモニーはいずれ劣らぬできばえだった。やさしい歌声や迫力のある力強い歌声がある一方で、ジェスチャーたっぷりに表現する国際チームなどさまざまな特徴を発揮した。

溝部司教がチーム一つひとつについて講評、審査の結果は『祈りを感じさせた』と徳島教会に第一回目の司教杯が贈られた。

優勝した徳島教会チーム

春の司祭集会・研修会開催

活発に司教との意見交換

去る五月十二日（水）～十三日（木）に北条カタリナ・セミナーハウスで「高松教区全司祭研修会」が開催された。テーマを「わたしの司祭としての歩み」とし、高松教区で働く司祭同士が分かち合い、意見交換をして、兄弟的な交わりの研修会を行った。

一日目は、「叙階記念カード」を持ち寄り、叙階を受けた頃に思いを寄せた気持ちと、派遣を受け歩みながら感じてきた喜びや苦しみ、そして現在思いを寄せていることを、五つの小グループ五～六人に分かれ、分かち合った。

二日目は、「〇九年度臨時司教総会報告と課題」、「大阪管区司牧者研修会（二〇一一年六月七日～九日）準備報告と課題『司祭職召命』」について溝部司教との意見交換を行った。

司教は、司教総会報告と課題について「・・・日本司教団は、ナイスから二十年が過ぎ日本の教会の方向性を確認し、福音宣教の今後について検討している。そのため各教区へ四つの質問が投げ掛けられている」ことを話された。それは、

① 現代の日本の教会が、求められているものは何か？
② 各教区に求められているものは何か？
③ 各教区で求められていることに対して教区で取り組んでいることは何か？また、何が必要と思えるか？
④ 教区の現状はどうなっているか？

ということであった。

これらの課題をうけた司祭団と司教の活発な意見交換の中で、事業体の活性化を望む意見、外国人司牧、信徒の養成、外部とのネットワークの充実などの多くの意見が挙げられ、司教との意見交換（ピン・ポン）ができた。最後に、感謝の祭儀を捧げ司祭集会・研修会を閉じた。

はばたき

平成二十一年暮れ、厚生労働省は特別養護老人ホームの入所申込者は四十二万人余りとの調査報告書を発表しました。

国民のニーズは特養ホームですが、国の十五年後の方針はグループホーム十三万人から三十五万人への有料老人ホームの増設です。主力は二十人単位の小規模多機能型居宅（ヘルパー、通所、宿泊）を五百ヶ所から全国三万ヶ所にすることです。

高知県の同時期調査では、六千三百人。複数申し込みの名寄せ入所対象となる要介護三以上の実質入所申込者は約二千六百人。人口当たりの施設充足率は徳島県が全国一位、高知県も上位で現在五十二施設、定員三千四百三十六人です。

前年もほぼ同数でしたが、待機場所が在宅十八パーセントが通年の三パーセント減とグループホームやユニット個室の特養に入所したが経済的に大変で、利用料の安い多床室の四人部屋に移りたいと願っているケースが増えた現れです。

あなたの教会は周りに生きている人々とどのように関わりを持っているでしょうか。現代社会の諸問題を敏感に感じているでしょうか。

皆さん全員「老い」を体験します。是非身近な問題として介護の事を話し合ってみませんか。

ケアマネジメントの解説書には、欧米においては介護予防の為の重要な社会資源として位置付けられ役立っている事が報告されています。

小教区や協力宣教地区で具体的な―生きがい・課題活動（祈りなど）・社会参加（典礼など）―プログラム活性化を願ってやみません。

司教館の窓から
司教のひとりごと

復活祭後、ソン神学生と韓国光州を訪問した。光州教区の大司教と大神学校の院長に感謝するためであった。それが終わって、小学校時代を過ごした釜山を訪問した。仙台時代に知己となった韓国の人達に案内され、私が育った家を訪ねることにした。どうして良いのか分からないので「近・現代歴史博物館」を訪問し、昭和十年代の市街地図を発見した。その地図を頼りに自分の家があった場所に辿りついた。今は居酒屋となっていて昔の面影は全くない。家の前を小川が流れていて、そこで終戦の玉音放送を聞いたのを覚えている。

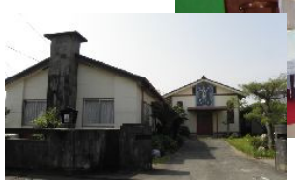
七十五才の今、戦前、戦中、戦後と動乱の時代に生きたことを、そこに立ちつくしたまましみじみと思った。その中で神様が教会に導いて下さったことに深く感謝して頭をたれた。

子どもの集い
司教様の似顔絵

小教区紹介

今号百三十七号から高松教区内の小教区を紹介するシリーズです。初回は高知地区にある安芸教会と赤岡教会を取り上げました。

赤岡教会



現在協力宣教司牧態勢の中で両小教区の責任司祭としてブルゴワン師（オブレート会）が責務を負っているが、ここも例外なく地方の過疎化と高齢化の現実が如実である。主日のミサには両教会で外国籍信徒を含む四人～十八人ほどが参加。子どもは小中学生合わせて四人という。そういう中での教会の経済状況は推して知るべしである。昔からの信仰を守りながら、七十歳代から九十歳代の方々が教会の運営と維持管理に関わっておられると聞き、両小教区の窮状をひしひしと感じる。社会活動はとても無理と思われる中、赤岡教会には日本初と言われるＤＶシェルター・があり、シモンズ師と武田さん亡き後、オブレート会がなお引き継ぎブルゴワン師を中心に再出発を期している。これらに鑑み、将来の構想として高知地区の全小教区をひとつの教会共同体とし、司牧・経済・維持・管理においても共に分かち合うことが望まれている。

復活徹夜祭

復活徹夜祭の夜、高松より到着された氏家神父様をお迎えし、高知市からバイクで来られた野村健介君と共に、総勢六人でのミサになりました。普段から安芸教会では、アカペラで聖歌を歌っておりますが、氏家神父様の上手な歌声でリードして頂き、気持ちよく歌う事が出来ました。又、お説教も分かり易く、良いお話しでした。高齢化が進んでいる昨今ですが、今年は例年にもまして、家族の看護や病気等で復活祭の参加者も少なかったようです。「呼ばれています。いつ～も♪」とはいえ、南国インターから一時間近くもかかる高知県東部地域の信者四人の為だけに遠路はるばる来ていただいた事に、我々一同感謝の念で一杯です。翌朝は高松でのミサが有るとの話で、復活徹夜祭のミサ終了後の夜九時近くに安芸を出発され、高松まで戻られました。どうぞ次回は、泊まりがけでゆっくりお出で下さい。

安芸教会　山口　幹

安芸教会

西日本司祭交流会に参加して

教区神学生のソン・ヒョングンと申します。先日参加した、西日本司祭交流会という集いについて報告させて頂きます。これは、西日本の司祭の相互の連携・交流を目指して開催されているものです。今回は、下関が会場でした。高松教区も司教様はじめ神父様方・助祭様・ブラザーが参加され、私も加えて頂きました。当日は雨天により、ソフトボール大会の予定が変更されボウリング大会となりました。司教様より「優勝杯を持って帰る」という使命を受けていたので緊張しましたが、無事に成し遂げられて安心（？）しております。その後も、神父様方と交流させて頂くことができました。今回参加させて頂いて、本当に沢山の神父様がそれぞれの場所で一生懸命に神様のために働いていることを知ることができました。また、私と同じ祖国韓国の神父様方とお話しする中で、私も神父様達のように将来生き生きと司祭職を務めたいと思いました。

ソン神学生

ひと　香川　桜町教会　安部重竹さん

石彫刻と共に四十余年

遊び心あふれる作品

部屋の中に所狭しと居並ぶ石彫刻の原型に囲まれ熱く語る。

１６歳で石工職に入った先代の政義さんの石彫への情熱を自分のものとしたのは、高校を卒業してから。以来これまで数多くの作品を手掛けてきた。よく知られているのは桜町教会の石原孫右衛門父子像。先代の構想さなかの逝去の無念を継ぎ、桜町教会献堂５０周年記念として約3年の月日をつぎ込んで完成させた。信仰者として年を経るにつれ石彫への入魂にも一段と渇望が強まる。大阪司教座玉造教会の高山右近像、細川ガラシャ像など信仰に裏打ちされた作品を輩出された先代の信仰の遺産が二代目にも伝わっているのは確かだ。毎年開かれている「石の里のアーティストたち」展や個展など精力的に活動している。他の仕事と違い膨大な時間と労力を必要とする事に比して、それが生活の安定につながるとは限らないことを百も承知での仕事である。これまでは興味深い仏像に力を注いできた。しかし人生の集大成として聖母子像などカトリック聖像に取り組む姿がそこにあった。

聖母子像の前にて

谷口広海

ちょっと ひといき

子ども川柳　こどもと中高生の集いにて

イエスさまに　いつもイエスと　応えたい
春風に　押されて言った　よろしくね
春の朝　小鳥がチュンチュン　鳴いている
ありがたや　春のいい風　この出会い
火の神が　炎とともに　いざまいる
カルタとり　走って取った　だい一位

『典礼奉仕』のために ⑨

高松教区典礼委員　稲毛利之師

復活を体験する典礼②

復活節が終わりましたが、わたしたちは引き続き、年間の典礼によって主の御復活を体験し思い起こしていきます。

復活というと主の右側の十字架に付けられた盗賊が思い浮かびます。そこで盗賊は主のみことばを聴きます。

「アーメン（まことに誠に）汝に告ぐ。今日汝は我と共にパラダイスに在る。」

この瞬間、盗賊にとって〝天国〟の意味はなんだったのでしょうか？わたしたちにも、こういう声が聞こえてきます。

「たとえあなたがどんなに落ちたとしても、わたしはあなたよりもっと深く苦しいどん底であなたを待っていたんだよ。あなたと一緒に生きるために。」

盗賊はこの時初めて、「私は生まれてきて良かった！」と心の底から思ったでしょう。彼は赦しを体験しました。そしてその赦しを受け容れました。そこで盗賊はイエスを通して本当の自分自身を見出したのです。彼は復活を体験しました。かの盗賊にとって、イエスと共にいる処―これが天国です。

他には何処も？そうです。それ以外何処にもありません。

モーセの証言を聴きましょう！

「あなた御自身が共に行ってくださらないなら天国（約束の地）に行きません！」（出エジプト記三十三・十五）

盗賊にとって天国は十字架の上でした。最も恥辱にまみれた最も苦しい処が天国と成ったのです。これはアダムの罪の結果呪われた土、そこから獲られた労働の実りであるパンと葡萄酒が、キリストの体に聖変化するのに似ています。これこそ復活体験でしょう。

ドストエフスキーの小説「罪と罰」がこの事の理解に助けになります。主人公ラスコーリニコフはシベリアの流刑地で復活を体験します。彼の天国は「シベリア」「流刑地」に在りました。

最も過酷な最も絶望的な処がそのまま天国に変えられました。そうして、ひとりの汚い罪人がそのまま生きた〝聖体〟に変えられていくのです！

イエス御自身こそ私たちの天国なのです。イエス御自身以外に天国はない。それがどんな処でも、そこにイエスがおられなければ、それは地獄なのです。

そして、イエス御自身以上の宝はない。

「あなたの富があるところに、あなたの心もある。」

「私は空の手であなたのみ前に出ることでしょう。（中略）私はあなた以外のどんな王位も、どんな王冠も望みません。おお、私の最愛の方！」（幼きイエズスのテレジア）

復活とはこの世に死んでイエスに出会うことです。そしてイエスとの出会いを通して、本当の自分を見出すことです。「私は生まれてきて良かった！」と本気で心の底から思いながらイエスと一緒に生きることです。

全ての典礼は、このイエスと人格的に出会うためにあるのです。そして典礼はこのイエスとの出会いを通して、あなたの日常や現実をそのまま天国に変えていきます。

「足から履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから。」（出エジプト三・五）

テーマは「召命」

(2010. 4. 24～25 子ども＆中高生の集い)
愛媛県教会学校教師会
松山教会 濱田麻里子

「来年は愛媛県が担当です」と発表されて終わった昨年度の香川での「集い」の後、愛媛の担当者は、早速準備にとりかかりました。

百名以上が一泊二日の日程で集まれる場所、また召命を軸としたテーマの決定・内容・かかる費用等、取り組む課題の大きさにとまどいと不安を感じていましたが、昨年からのテーマ「召命」を軸に考えていきました。また寄付という形でより多くの方に参加していただき大きなヒントになったのは「司祭年」という事でした。

教会に来る子ども達にとって神父様は身近な存在でありながら、司祭としての仕事は日曜日のごミサくらいしか知られていないかもしれないと感じ、また司祭の役割を知ってもらい、そこから召命へとつながる事も期待しつつ「神父さまってどんな人」をテーマに決定しました。そしてまずは自分たちの教会の神父様について知ろうという宿題を出しました。その分各教会学校の先生方にはご負担をおかけしてしまいましたが、各教会それぞれに個性豊かなすばらしい作品になりました。

カルタ読み札

あ
＊あいがいっぱい　神父様
＊あらしはいいよ　神父様

い
＊いのりが大好き　神父様
＊いつも えがおの神父様
＊いつも笑顔で
とてもやさしい神父様

そして班活動では、「・・神父様」で終わるいろはカルタ作りをしました。その後のカルタ取りもみんなが本気で絵札に向かって走っていく姿はすごい迫力でした。本当に楽しんでくれていると感じました。

講師にサレジオ会の佐藤直樹神父様とドミニコ会の田中正史神父様をお迎えし、小学生、中高生に分かれて「召命」というちょっと難しいテーマを少しでもわかりやすく、子ども達の心に残るお話をしてくださいました。

また集いの間に感じた事や考えた事を俳句に詠むという松山らしいプログラムもあり、ミサの前に一人一人が振り返りとして発表しました。（ちょっとひといき参照）

最後になりましたが、集いの最初にした劇「ノアの箱舟」の台本・大道具・小道具、その他の準備や運営をほとんど松山地区の青年が、また四国各県はもとより、東京からも３名の青年がリーダーとして参加してくれた事にとても感謝しています。

若 い 力

「若者と聖書」 ～参加を契機に、教会に復帰

松山教会 桑田高明

両親共にクリスチャンの家庭で育った事もあり幼少の折は足繁く教会に通っておりましたが、思春期に入って以来、その門を潜る事を拒んでおりました。

何故なら、当時の私にとって教会とは生活習慣の一部であり、主体的に選択した宗教としての意義、つまり「信仰」としての意味合いを持たなかったからです。そのような弱い意思の状態でありましたから、日々の忙しさを言い訳にカトリックを遠ざけてしまったのでした。しかし数年前、高松教区の「若者と聖書」への参加を契機に、また教会へと復帰する事が出来ました。一度信仰を離れた私を再び暖かく迎え入れて下さった、そして霊的に指導して下さった方々には感謝が尽きません。

以降、種々の教会活動に関わらせて頂きましたが、その中で「人格の中心に信仰を据える」事の重要性について学べたように思います。己の安寧を求める傲慢で奔放な意思に何かを従わせるのではなく、主が何を望まれているかに耳を傾け、その声から逃げないように努める事がその一歩だと信じております。

その為には、特に人々を通して語りかけてくる聖霊の働きかけに対して敏感になる事、また自らの信仰に矛盾しない生き方が求められます。いきなり大きな何かが出来る訳ではありませんし、自らの信念を持つ事には相応の覚悟が必要ですが、常に前進の意識を持ちながら祈りと生活を行えればと考えています。

松山教会で青年会活動を行っている桑田高明さん

教会では子供達と関わる機会が多くあります、彼等が多感な年齢となる頃に自らの意思でカトリックの信仰を強く持ち続けていられる、そのような共同体を目指して、微力ながら活動を続けて参りたいと思います。

福者 ナバロ神父をしのぶ

島原半島巡礼の旅　下

今村刑場で殉教

ナバロ神父が殉教した今村刑場跡は住宅街の中で、そこだけクスなどの大木が茂り小さな森になっていた。潅木の茂る中央に『供養塔』と彫られた墓石のような碑があった。

有馬で捕われたナバロ神父は伝道士ディオジニオ福島ら三人のキリシタンとともに島原に連れてこられた。レオン・パジェスは四人の殉教の模様を次のように生々しく伝える。

一六二二年十一月一日午前十時ごろ領主板倉重政から火刑の判決を聞かされたナバロ神父は喜んで受け入れた。昼少し前、神父はロザリオを首にかけ修道服を着た。そして処刑される他の三人とともに連祷を歌いながら刑場へ引かれていった。刑場の矢来の中に入ると縛られる柱の前でひざまずき祈った後、群衆に向かって悲壮な面持ちで最後の説教をした。言葉は縛られてからもなお続いていた。

矢来の外には大群衆がつめかけていた。領主が着くと役人たちが薪に火をつけた。燃え上がった火の中で神父の修道服が焼け、布切れがひらひらと舞い上がった。つぎいに縛っていた縄が焼けて神父は前に倒れたが、絶命するまで「イエズス、マリア」の御名を唱える声が炎の中から聞こえていた。遺骸は三日間そのまま放置され、さらに焼かれて灰にされ有明海に捨てられた。

小さな森の中に「供養塔」と彫られた石碑がある今村刑場跡

道後で初めて宣教したころの若き神父はすでに六十二歳になっていた。日本に着任以来、迫害という試練の中で神への愛と人々への奉仕に自分を捧げつくした三十四年間だった。日本の信徒とともに信仰を力強く証しし殉教の栄光を得たナバロ神父は一八六七年（慶応三年）、教皇ピオ九世によって日本二百五福者の一人として列福されたのだった。

刑場跡には初冬の日差しが延び、少女が二人無心に石を拾っていた。『苦しかったでしょう。あなたは神様から託された役割を立派に果たされました。あなたが初めて宣教した地に建てられた道後教会と四国の教会を見守ってください』―ナバロ神父の苦難に満ちた生涯を思いながら、私は石碑の前で神父に語りかけていた。

道後教会　丸尾 修

高松教区諸委員会紹介

「典礼」委員会

委員長　三宅克也

「まずは聖歌合戦で一戦交えましょう！」

春から夏にかけ、授業のお手伝いに坂出に向けて五色台のトンネルを抜けます。山を覆う美しい桜、そして今は雨に洗われた青葉若葉の季節です。四国の季節が心を巡ります。

さて、教区典礼委員長を仰せつかり一年になりますが、未だ典礼とは何かを考え続けています。昨年まで、典礼と聞けばミサの準備など式典云々、そんなイメージを持っていました。でも、今辿り着こうとしている一つの答えは〝季節〟です。カトリックの典礼とは、〝巡る時の流れ〟だと感じ始めています。季節は地球、太陽、月、星の動き、そこに住む人々に全てに平等に与えられる宇宙の流れだと思います。人は遥か昔から、その時の流れを通して神を感じ、いろいろな方法で祈りを捧げてきました。

今は、二十四時間、闇がなく、暑さも寒さもコントロールできます。季節を感じるには難しい時代です。神様に感謝する心を持つことが難しい時代に入ったのでしょう。でも、じっと根っこを下ろした珊瑚ですら、月の力を感じ取って、ある晩一斉に産卵を始めます。まるで〝命あるすべての者は神を讃えよ〟と歌っているかのようです。

地球規模で考えれば、地球が回るに従って、切れ目なく、どこかでミサ典礼が挙げられています。一つになれるカトリックの底力はここにあると思います。長い年月をかけて作られたカトリック典礼は教会にとって要です。聖書があっても、典礼がなければ単に情報がおいてあるにすぎません。逆に押し付けられた典礼に従えば心がバラバラの教会になるでしょう。

二年生になった教区典礼チームは、カトリックの典礼について勉強を始めたばかりですが、高松教区に合った〝キリスト・センサー〟を押し上げる典礼を目指したいと思います。まずは、耳や目など、人間に備わっている五感を大いに刺激したいと思います。手始めに六月六日、谷口広海助祭叙階にぶつけ、第一回高松教区司教杯聖歌合戦を開催しました。祈りを歌にすると二倍祈ることになるそうです。その次は福音俳句合戦や山歩きみたいな季節巡礼オリエンテーリングも考えています。生涯養成委員会と協力して、聖書のわかち合いの手引書も作りたいと思います。この七月上旬、典礼にお力を貸して下さる方々を各小教区から集めて情報網も徹底することも計画しています。もっともっと〝神様センサー〟を敏感にして、高松教区にあった典礼をつくるために新しいアイデアをどんどん出し合い実行していきましょう。

医療法人社団聖心会 阪本病院
看護師・准看護師
随時募集中です！
院内保育園開設

ご連絡を
お待ちしています。
連絡先（事務局）
0120-770-315

聖ドミニコ宣教修道女会

私たちは、自分を創造しようとするこどもを
まなび、護りましょう
暁 の 星 学 園
鳴門聖母幼稚園　高知聖母幼稚園
阿南聖母幼稚園　海の星幼稚園

医療のともしび（21）

あなたが セカンドオピニオンを聞いた時に

「私の胃にガンができています。しかもスキルス性ガンといって進行の早い悪質なガンです。」逸見正孝さんの記者会見の発表は会場にいた人たちを驚かせ、そのニュースは全国に広がりました。奥様は夫のガンの治療について回想し「何回も夫にセカンドオピニオンを聞いてほしいと頼みましたが、夫は聞いてくれませんでした。そんなことをしたら今僕のガンを精一杯治療してくれている主治医の先生に失礼になる。そんなことは僕にはできないと言ってきかないのです。」と語っています。セカンドオピニオンというのは、今の自分の病気の治療について主治医の先生の治療方針とは別に他の先生の見解を聞いてみることです。場合によっては二番目の先生の見解を受け入れ、主治医を変えるということも起こり得るでしょう。以前は最初の先生に失礼になると感じる人が多かったのですが、段々いろいろな意見を聞いて最良の選択をするのがよいと考える人が多くなり、今ではセカンドオピニオンを聞くことに対して医師も患者も変な感情的なこだわりをもつことはずっと少なくなっています。

しかしながら、それと同時に患者さんにとって難しさも出てきます。例えば８０歳のガンの患者さんの治療について、最初の先生が「手術をした方がよいかどうかですが、私は６０％は手術を勧めます。するかどうかはご本人と家族の方で相談してください。」と言い、二番目のセカンドオピニオンの先生は「私は手術の可能性は４０％くらいで、抗がん剤の投与と放射線治療の併用の方がよいと思います。どちらにするかはご本人と家族の方で話しあってみてください。」と言った場合どうしたらよいでしょうか。二人の医師の意見を基に、患者さんの希望、家族の人たちの考え（家族の考えも一つにまとまらない場合もあります）などを総合的に判断して、最終的に一つの選択をすることが求められます。ここに難しさがあります。一人の先生を信じて先生の言われる通りにしようという選択ではないのです。

聖マルチン病院　井原彰一

諸宗教対話委員会

比叡山巡礼から学ぶ

委員長　西川康廣助祭

香川県宗教者平和懇話会主催「比叡山・京都巡礼」が、五月十七日（月）～十九日（水）二泊三日で開催された。北は北海道から四国までカトリック教会、立正佼成会、真言宗善通寺、臨済宗妙心寺派、真宗興正派専光寺、仏教真宗から三十名強の参加者があった。

天台宗総本山 比叡山延暦寺

一日目、比叡山では先ず初めに境内約１・５キロの林を西塔地区・釈迦堂付近まで歩いて行き、特別にわれわれ巡礼団のために修行の場を見学させていただいた。ここでは九十日間寝ずの祈りを唱えながら、悟りを目指し歩き続ける苦行が行われているとのことである。続いて東塔地区の阿弥陀堂・国宝殿を見学し、最後に宿泊施設で比叡山の管長をお招きし、夕食懇親会の場を持った。宿泊施設は琵琶湖が一望できる延暦寺会館という宿坊で、特に部屋からの夜景眺望は絶景だった。辺りは神の創造の御手の業を感じさせる大自然に囲まれ、祈りとお寺の鐘の音が時折鳴り響く聖なる雰囲気の中にあった。

二日目、延暦寺総本山お堂において朝のお勤め（祈り）に一般参拝者に混じって全員が参加した。朝食後、延暦寺会館において香川県善通寺出身の小林管長をお招きし、われわれ巡礼団と一緒に平和懇話会の場を持ち、一時間程度小林管長による比叡山の歴史・宗教の意味や目的・宗教心などについて話しを聴き、質疑応答や分かち合い時間が取られた。

午後からは比叡山の幾人かの僧侶も参加くださり、一緒に「平和の祈り記念碑」の前で合同の平和祈祷を捧げた。こうして比叡山での全日程を終了し、下山して次の巡礼先である京都西本願寺近くにある大本山妙心寺へ向った。

大本山妙心寺

先ず、法堂を見学したが、天井には、狩野探幽の筆による雲龍図があった。内部のケヤキの柱は、原木四つ割にして丸く削られたもので、富士山麓より海路によって運ばれたそうである。雲龍の姿は、事実建物の東西南北から眺めることによりその姿は異なる。上り龍或いは降り竜と呼ばれている見事な姿を呈する。その後甲子園球場八つ分くらいはある境内の建物や庭園を見学し、最後に大方丈において座禅を体験した。昨年のローマ・アシジへの巡礼を皮切りに、香川宗教者平和懇話会は年に一度の巡礼を取り入れ、今年は比叡山への巡礼が実現できた。宗教者が一同に会してともに祈り、交わり、分かち合いながらお互いを思いやり尊敬し合う、そこから平和の第一歩が始まる、そのような気がした。

三教区合同ホームページ研修会の案内

◆大阪教区・京都教区・高松教区の各小教区ホームページ担当者向けの研修会です。

◆講演会のあと担当者によるホームページ運営に当たっての交流会を企画しています。

是非！ホームページ担当者の方はご参加ください！

日　時＝二〇一〇年九月二十日（月・祝）
　　午後一時半～午後四時半（午後一時受付）
場　所＝カトリック大阪大司教区　司教館　一階集会室
主　催＝カトリック大阪大司教区本部事務局企画広報課
　　カトリック京都司教区広報委員会
　　カトリック高松司教区広報委員会

日本カトリック医師会高松支部からのお知らせ

今年、日本カトリック医療関連学生セミナーを坂出で開催します。医療系学生のみならず、医療系職員、さらに一般信徒や市民も参加できます。興味があれば参加してみませんか？

一般向けの企画として、「こうのとりのゆりかご」（メディアでは赤ちゃんポストとして報道）で有名な熊本県の慈恵病院 蓮田太二先生が来られ、講演をされます。

日　時＝二〇一〇年八月二十一日午後一時三十分
場　所＝坂出グランドホテル　一階会議場
参加費＝無料

人間の生命の根幹に関わる大切な生きた勉強ができるはずです。ぜひご参加ください。当日は直接会場にお越し下さい。ご家族友人などお誘いあわせの上、ご来場をお待ちしています。

なおこの会は、「カトリック医療の原点、現在そして未来」というテーマで八月二十日～二十二日までの三日間開催されます。講演を全て聴くことも可能ですので、ご希望の方は、日本カトリック医師会ホームページをご覧下さい。

聖マルチン病院　整形外科　田賀谷健一

新刊書籍紹介

■どう、生きたらよいのか
一人・家族・社会のありようを考える

混迷の時代に何が生きる指針となるのだろうか―。現代人が抱える心の闇に森司教が光を当てる。複雑な現代社会の中でもがき苦しむ人々が、希望を見いだし、闇から抜け出すための小さなヒント。キリスト教の人間理解に立ちながら「生きるとは何か」を考える。『キリスト教入門Ｑ＆Ａ』に続く二作目。

Ａ５判・264頁・定価1680円
教友社刊　森　一弘 著

■聖書読解へのアクセス―５０のポイント

通常の入門書では扱わない聖書についての疑問に答える。

聖書を読むときに誰もが感じる疑問点をＱ＆Ａ式で解説する。

「聖書の正典とは」「聖書の著者は神、ということの意味」「聖書の正しい読み方とは」「奇跡物語の史実性」「殺人を命じる神？」「なぜ礼拝（ミサ）で旧約を読むのか」「どうしてイエスやパウロは命令調なのか」「福音書の記事は本当にイエスが語り、行ったことなのか」など、聖書を読むために必要と思われる知識を得、センスを養うための指南書。

四六判・224頁・定価1365円
教友社刊　湯浅俊治 著

■神様の愛の火

このほど徳島教会の高田芙美さんが詩集【神様の愛の火】を上梓された。

詩集【魅せられて】、歌集【一粒の麦】に続く第３作目である。「この妻にしてこの夫あり」とでも言おうか、彼女のご主人は先年【江戸俳諧逍遥】で県の出版文化賞を受賞した、文人としても有名な故高田保二氏である。新詩集【神様の愛の火】は、２００９年に帰天されたご主人の介護に明け暮れた苦悩の日々から生まれた作品である。

長年、教区の活動に尽力されてきた彼女を知る人は多いと思うが、普段の彼女は溢れる文才などおくびにも出さない慎ましい女性である。内に秘めた衒うことなき信仰心の発露が、深く読む者の胸を打つ。ぜひ一読され爽やかな読了感を味わっていただきたい。

四六判・157頁・2000円(税込)
編集工房ノア　高田芙美 著

教区スケジュール

7月
- 1日（木）ペトロ岐部司祭と１８７殉教者祝日
- 3日（土）聖トマ使徒
- 4日（日）年間第１４主日　結城了雪祭（阿南）
- 6日（火）司祭評議会　10:00
- 11日（日）年間第１５主日
- 14日（水）宣教大会準備会　13:30
- 18日（日）年間第１６主日
  元気を出そう中高生ミサ
- 19日（月）高山右近祭（小豆島）海の日
- 23日（金）宣教司牧評議会役員会　13:00
- 25日（日）年間第１７主日
- 26日（月）聖ヨアキムと聖アンナ
- 30日（金）聖イグナチオ・ロヨラ
  四国会館大掃除（～３１日）

8月
- 1日（日）年間第１８主日
- 4日（水）聖ヨハネ・ヴィアンネ
- 5日（木）広島平和行進
- 6日（金）主の変容
  日本カトリック平和旬間（～１５日）
- 8日（日）年間第１９主日　平和ミサ
- 12日（木）歌って踊って平和を語ろうin徳島（～１３日）
- 13日（金）青年韓国交流ツアー（～１８日）
- 15日（日）聖母被昇天「高松教区司教座献堂記念日」
- 20日（金）カトリック医療セミナーin香川（～２２日）
- 21日（土）第３６回教会学校教師会in愛媛（～２２日）
- 22日（日）年間第２１主日
- 27日（金）＜佐々木光雄師命日＞
- 29日（日）年間第２２主日

編集後記

お詫び
前号百三十六号・島原巡礼記事中「八良尾やらお」は「はちらお」の誤りでした。訂正してお詫びします

教区報原稿収集には苦労します。やはり四国時間というものがあるようで・・・

原稿締切日を厳守していただきますようお願いします。

Ｈ・Ｔ

学校法人 聖母学園 桜町聖母幼稚園
〒760-0074
香川県高松市
桜町1丁目8番13号
TEL:087-831-0328
FAX:087-834-4443

E-mail：info@sakuramachi-seibo.net